研究論文

「介護等体験」指導に対する学外指導者からの 指導や助言に関する調査研究

藤重育子

1. はじめに

義務教育の教職を目指す学生が受講する「介護等体験」に関しては、養成校においても 実習がスムースに行えるよう学生指導や実習前後におけるサポートを行っている。介護等 体験は教育実習への前段階での実習となるため、教育に関する指導のみならず様々な配慮 が必要となる。実習先として、社会福祉施設(5日間)および、特別支援学校(2日間)で あり、学内外から実習生へ向けられる指導は、今後の教育実習や将来就く教職においても 活かされることと思われる。

2. 目 的

小学校及び中学校の教諭の普通免許状の授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法 律「介護等体験特例法」(1997年6月18日法律90号)が議員立法として成立し、義務教育 の教員免許状取得にあたって「介護等体験」が必須の要件になり20年が経過した。福伊 (2018) によると、介護等体験は専門職を養成する「実習」ではなく「体験」であること述 べており、知識や技術やスキルなどの習得を第一の目的としていない「人と出会う体験であ る」とまとめている。当時の書物において、導入時は批判や戸惑いがあったという報告が多 いように見受けられるが、伊藤(2010)では、実施当初に比べれば学生を受け入れる特別支 援学校・社会福祉施設側での体制も大学における学生の送り出しの体制も、格段に整ってき たという考察を残している。このことから、施設側の意識も少しずつ変化してきていること がわかる。その後、学生指導の面や学内カリキュラムに関する先行調査研究がいくつか見ら れるようになってきた。例えば間山(2017)は、科目「介護等体験指導」において提出され た学生の体験日誌に記された記述を通して、介護等体験を指導する方法について検討する実 践報告を行っている。また山本(2017)では、大学外の体験は学生にとって大学で得た知識 についての理解を深めるとともに学生の視野をひろげ、教師として求められる多様な価値観 の理解や他者のニーズを感じとる感性が磨かれる貴重な体験であることを指摘している。こ のように事前事後指導における学生指導や学生の認識変化について先行の研究報告はいくつ か目につくが、学外施設において職員の認識や指導における重要視点に関してはあまり見ら れなかった。そこで今回は、それらの指導のもととなる実習先施設である学外指導者の認識 を把握するとともに指導や助言の内容について調査し、それらを学生へ還元することで、「介 護等体験」の実習に対する心構えや教育実習に繋がるサポートの一助としたい。

3. 方 法

対象は介護等体験実習担当者として、社会福祉施設 29 施設と特別支援学校 16 施設の計 45 施設へ質問紙調査を依頼し、返信用封筒にて回収した。質問紙内容については、実習担 当者の属性と実習に関する 5 つの記述式項目からなる A4 用紙両面で作成した。記述式項目内容に関しては、結果において詳細を記す。

4. 結果と考察

調査依頼をした計 45 施設より実習担当者が複数名の施設は複数の回答結果があり、それぞれ社会福祉施設 23 施設(79.3%)の 37 名(男性 18 名、女性 19 名)、特別支援学校 9 施設(56.3%)の 9 名(男性 5 名、女性 4 名)、計 46 名から回答が得られた。

(1) 属性

回答者の所属施設による人数の内訳を表1に示す。割合としては、社会福祉施設で30歳代、特別支援学校で50歳代が最も多かった。社会福祉施設の方では複数名からの回答も見られたことから、担当者の年代にあまり偏りがなく、あらゆる年齢の指導者がいることがわかった。

年代	社会福祉施設	特別支援学校	全体
20歳代	4名(10.8%)	2 名(22.22 %)	6名(13.0%)
30歳代	13 名(35.1 %)	1名(11.11%)	14 名 (30.43 %)
40歳代	10 名(27.0 %)	1名(11.11%)	11 名 (23.91 %)
50歳代	10 名(27.0 %)	4名(44.44%)	14 名 (30.43 %)
60歳代	0名(0.0%)	1名(11.11%)	1名(2.2%)
合計	37 名 (100.0 %)	9名(100.0%)	46 名 (100.0 %)

表 1. 各施設における回答者の年齢

在職年数の内訳を表 2 に示す。どちらの施設においても在職 5 年以下が最も多く、全体では在職 10 年までで 70% 以上の回答者が占めていた。平均在職年数を算出したところ全体では 7.84 年であった。また社会福祉施設では 8.63 年、特別支援学校では 4.25 年と在職年数に開きが見られた。先ほどの年代ともあわせて考えると、回答施設以外でもこれまで様々な経験を積んだ職員が回答されていることが推測できた。

年数	社会福祉施設	特別支援学校	全体	
5年以下	17 名(47.2 %)	6名(75.0%)	23 名(52.3 %)	
6~10年	7名(19.4%)	2名(25.0%)	9名(20.5%)	
11~15年	5名(13.9%)	0名(0.0%)	5 名(11.4 %)	
16~20年	5名(13.9%)	0名(0.0%)	5名(11.4%)	
21年以上	2名(5.6%)	0 名 (0.0 %)	2名(4.5%)	
合計	36 名(100.0 %)	8名(100.0%)	44 名 (100.0 %)	

表 2. 各施設における回答者の在職年数

次に実習担当となる施設における窓口の人数を表 3 に、職務として介護等体験の専任か兼任かについて表 4 に示す。社会福祉施設においては複数名の担当者が、特別支援学校においては 1 名の担当者が最も多かった。平均値を算出すると全体では 2.5 名という回答であり、社会福祉施設は 2.68 名、特別支援学校では 1.78 名と若干ではあるが社会福祉施設の方が実習担当として人数が配置されていることがわかった。いずれも他の実習と兼任で担当していることが多く、福祉士や教員志望のための養成校からの受け入れに対して同じ担当者が割り当てられていた。

人数	社会福祉施設	特別支援学校	全体
1名	10 名(27.0 %)	4名(44.4%)	14 名(30.4 %)
2名	6名(16.2%)	3名(33.3%)	9名(19.6%)
3名	13 名(35.1 %)	2名(22.2%)	15 名 (32.6 %)
4名	5名(13.5%)	0名(0.0%)	5名(10.9%)
6名	3名(8.1%)	0 名 (0.0 %)	3名(6.5%)
合計	37 名(100.0%)	9名(100.0%)	46 名 (100.0 %)

表 3. 各施設における実習担当人数

表 4. 各施設における実習担当者の職務

年代	社会福祉施設	特別支援学校	全体
介護等体験のみ	9名(25.0%)	2名(22.2%)	11 名(24.4 %)
他の実習担当と兼任	27 名 (75.0 %)	7名(77.8%)	34 名 (75.6 %)
合計	36 名 (100.0 %)	9 名 (100.0 %)	45 名 (100.0 %)

介護等体験における事前オリエンテーションの有無について、全体として 91.3% が「ある」と回答しており、社会福祉施設では 35 名 (95.0%) が、特別支援学校では 7 名 (77.8%) が事前オリエンテーションを実施していた。オリエンテーションの平均時間として、社会福祉施設では 0.75 時間、特別支援学校では 0.90 時間、全体では 0.77 時間が設定されており、わずかではあるが特別支援学校における事前オリエンテーションの方が長かった。いずれにしても約 1 時間ではあるが多くの学生は介護等体験に向けての説明を受け、事前に準備や質問をする時間があることや配慮や支援方法に関して学びを得ていることが推測できた。

以上の結果から、介護等体験実施に関して施設側の担当人員や事前準備時間が充当されていることが明らかとなった。特色として、社会福祉施設では在職年数の長い職員が実習窓口として担当していることやその担当も複数名で行っていることがわかり、特別支援学校では事前オリエンテーションに時間をかけていることがわかった。

(2)「介護等体験」実習中や事前事後における指導に関する自由記述回答から

質問紙調査において「介護等体験中に押さえておくべき点」、「大学における事前事後指導において押さえておくべき点」についてたずね、自由記述での回答を求めた。時期に関

しても、施設種別に関しても共通項として記述されていた内容は、「マナーを守る、礼節を保つ」、「相手の立場になって考える、行動する」、「コミュニケーション(の方法を習得する)」、「施設、人、支援者のことを知る」、「教職課程で組まれている意味を考える」、「将来にどう活かされるか、課題の発見」、「守秘義務の厳守」の7項目であった。次に、施設種別による回答の相違点について、複数の記述が見られた回答からまとめる。

1)「介護等体験中に押さえておくべき点」についての記述

「介護等体験中に押さえておくべき点」についての記述について、社会福祉施設の実習担当者からは「職員の仕事について」、「介護現場の楽しさ、温かい雰囲気」、「当事者の家族の思い」、「できることは利用者にしてもらう」等といった福祉サービスの理解や内容に沿う内容である一方で、特別支援学校の実習担当者からは、「介護ではなく『教育』の場」、「支援の方法」、「障害の特性」等といった子どもの障害、支援や教育に重きを置いた内容が多かった。社会福祉施設においては、利用者の年齢や施設利用理由もさまざまであり、援助を受けながら自分らしい生活を送ったり、将来設計を立てたりする場合が多いが、特別支援学校の場合は、学習や生活上の困難を克服し自立が図られることを目的としており、障害児が個々の支援を受けながらいかに学習や生活のスキルをあげられるかが課題となる。そうした面でも両施設の特色が出ているといえるだろう。

2) 「大学における事前事後指導において押さえておくべき点」についての記述

「大学における事前事後指導において押さえておくべき点」についての記述について、社会福祉施設の実習担当者からは「『指示』ではなく『支援』の場であること」、「事前準備、実習先を調べておくこと」、「自己紹介や挨拶は自ら進んで行うこと」、「体験目標を立てられること」等があげられていた。特別支援学校の実習担当者からは、「障害特性を知る」、「予備知識をつけておく」、「自分のクラスにそういう生徒がいた場合、どのような配慮をすればいいのか、具体例を考える」という内容が記述から見られた。いずれにおいても、コミュニケーションに繋がる内容であり、学生自身の学習の度合いや知っている情報によっても支援の方法は異なるであろう。いかに体験現場において積極的に関わることや情報を得ることが大切であるということが考えられる。また社会福祉施設からの回答に「階段を利用すること」という記述がみられ、こうした内容に限らないが、エレベーターの利用やスマートフォンの使用等、便利な世の中になればなるほど、支援者のマナーや態度、姿勢等も振り返る必要があるだろう。いずれにおいても、実習中だけでなく事前事後においての学びを深めることで、介護等体験における数日間しかない実習の充実度が変わり、その後の教育実習へよい影響があるともいえる。

(3)「介護等体験に必要な力」についての自由記述から

「介護等体験に必要な力」として、「○○力」と続くように記述回答を求めた。回答欄は 10 個設け、そのうち記述がある内容の平均値は 5.31 個であった。施設種別に関係なく共通 項として、「想像力」、「集中力」、「行動力」、「『きく』力」の回答が多く、最も多かった語

句として、「コミュニケーション力」、「観察力」であった。教育実習と異なり教育的要素が 少ないことに加え、初めての学外への実習ということもあり、コミュニケーションを取っ たり観察したりする内容を施設側も期待していることがわかった。

表 5-1 には社会福祉施設の実習担当者(平均 5.41 個)から、表 5-2 には特別支援学校の実習担当者(平均 4.88 個)からの回答をまとめた。共通点として、コミュニケーションやきくことについて、記述数の降順では上位の回答であった。相違点としては、少数からの回答ではあるが、社会福祉施設の特筆すべき内容として「寄り添う」、「たずねる」、「一緒に、共に」、「しっかり見る」、「探る」等の語句が、特別支援学校の特筆すべき内容として「学ぶ」、「自発的」、「積極性」、「対応を考える」等の語句が挙がっていた。これらは福祉と教育の面で、それぞれ異なる立場からの必要な力として記述された語句であり、特に社会福祉施設では学生が横に並ぶことや向かい合うことが、特別支援学校では学生が前に出ることやその姿勢等の様子がうかがえた。

表 5-1. 社会福祉施設の実習担当者の記述

必要な力(○○力)についての回答	度数
コミュニケーション力(17)、会話力(3)	20
きく(聞く、聴く、訊く)力	11
観察力	10
行動力	9
思考力(2)、考える力(5)、考察力(1)	8
傾聴力	6
実行力(3)、実践力(3)	6
積極力	6
洞察力	6
忍耐力	6
話す力	6
共感力	5
学ぶ力	5
理解力	5
気付く力	4
想像力	4
体力	4
みる(見る、診る、観る)力	4
精神力	3
楽しむ力	3
注意力	3
伝達力	3
努力	3
発信力	3
判断力	3
アセスメント力	2
想う力	2
記憶力	2
気力	2
質問力	2
創造力	2
その人に寄り添う力、思いをくみ取る力	2
発想力	2
表現力	2
待つ力	2

必要な力(○○力)についての回答	度数
挨拶する力	1
相手と交わる力	1
当たり前を当たり前でないと考える力	1
敬う力	1
笑顔力	1
演技力	1
介護力	1
課題発見力	1
協力	1
計画力(目標・目的をどのように進める)	1
謙虚な力	1
向上心力	1
高齢者を尊重する力	1
自発力	1
収集力	1
集中力	1
柔軟な考えができる力	1
受容する力	1
瞬発力	1
状況把握力	1
知ろうとする力	1
遂行力	1
接遇力:敬語を使い人とうまく接する力	1
対応力:色々な態度に対して柔和に対応する力	1
楽しもうとする力	1
探求力	1
知識力	1
適応能力	1
なぜだろうと思う力	1
何でも知ろうとする力	1
能力	1
把握力	1
人を思いやる力	1
やる気	1
忘れる力	1

表 5-2. 特別支援学校の実習担当者の記述

必要な力(○○力)についての回答	度数
観察力	4
コミュニケーション力	3
積極的な行動力、積極的に取り組む力	3
自分から学ぼうとする力	2
素直に学ぼうとする力、素直力	2
体力	2

│ 必要な力(○○力)についての回答	度数
応用力	1
課題を意識して取り組む力	1
考える力	1
聴く・尋ねる力	1
工夫する力	1
行動力	1
子どものささいな反応に気づこうとする力	1
自主的に動く力	1
児童・生徒を尊重する力	1
自分の課題を発見力	1
社会人として自覚する力	1
集中力	1
職員に挨拶をする力	1
想像力	1
相談力	1
対人関係能力	1
挑戦力	1
適応力	1
何にでも興味を持つ力	1
人間力	1
人の役に立とうとする力	1
メモカ	1
連絡力	1

(4) これまでに受け入れた「介護等体験」学生の行動や配慮についての自由記述から

「介護等体験」を受け入れた際の学生の行動や配慮において見られた、良い例と悪い例に関して、自由記述を求めた。なおその際の学生に関しては、本学の学生に限らずこれまで受け入れた全学生を対象とした。

1) 良い行動や配慮の具体的な記述

社会福祉施設においては、「利用者に対して元気な受け入れと見送りができた」、「似顔絵を描いてプレゼントをしてくれて利用者が喜んでいた」、「特技や趣味の披露があった」、「『はい』とはっきり返事ができること」、「体験後のボランティアを希望した」等のより具体的な内容が挙げられていた。特別支援学校においては、「積極的である(質問、行動)」、「明るい」、「謙虚さがある」、「些細な反応に気付くことができる」、「元気よく挨拶ができる」等の人とコミュニケーションを取る際の最も重要な点が挙げられていた。それらの相違点として、社会福祉施設においては利用者の余暇を考えたり、個別ではなく全体的な活動、流れを想定したことが特徴的であった。特別支援学校においては、児童生徒の手本となる教員の姿が予想されるため、このような回答になったことが想像できた。

2) 悪い行動や配慮に欠ける具体的な記述

社会福祉施設においては、「メモを取らないこと」、「確認をとらずに行動する」、「知識がない」、「『うん』と返事をする」、「生活の知識や経験が少ない」、「電源でスマホの充電をする」等が挙げられていた。これらは学生の未知や幼さからくるものもあり、加えて、先述

した「(エレベーターではなく) 階段を利用する」ことと同様に、生活の中で面倒なことが少しずつ減り普段から便利な生活に慣れている分、このような場所においても、学生は悪気なく行動している点が見られる。実際に、学内や教室の電源コンセントには普段から学生がスマホの充電をしており、それを「おかしい」という感覚がない学生が多い。そうした便利さからくる生活上の非常識な感覚は、今後指導すべき点であることを反省した。特別支援学校においては、「不適切な服装」、「遅刻、無断欠席」、「子どもの失敗を見て嫌な顔をする」、「観察のみ、関わらない」等が挙げられていた。これらも、先ほどの良い行動や配慮の回答と同様に、児童生徒の手本となるべく行動を望まれるが、手本とは言い難い内容が挙げられており意識の低さがうかがえる。こうした点は、教職を目指す者には当然の内容であるため、今更の指導には含まれていなかった。しかしながら未知であれば、学生がそうした行動を繰り返してしまうことを反省し、細かな点ではあるが、一つひとつ丁寧に指導する必要性を感じた。

5. まとめ

「介護等体験」について学生への指導の一助とするため、実習先施設である社会福祉施設 や特別支援学校の実習担当者に認識や指導、助言方法に関する質問紙調査を依頼し、回答 を得た。回答には経験豊かな実習担当者も多く存在し、介護等体験の実習担当だけではな く様々な実習指導を兼任している人が多かった。オリエンテーションの時間が設けられて いることもわかり、教職を目指す学生が最初に受ける実習であることから、準備態勢が整 えられていることが把握できた。また自由記述の回答では、施設による特色が表れていた。 社会福祉施設においては、支援をすることや寄り添うことを中心に考えられており、生活 の質を上げることや雰囲気作りを大切にしていることが感じ取れた。一方で特別支援学校 においては、教育が中心となり支援を考えたり支援者が手本を示したりすることが重要で あると認識した。しかしながら双方において重要となるのは、コミュニケーションや相手 とどう距離感を保ちながら、その中で支援を考えていくかという点である。山本(2017) によると、自分の理屈や頭で理解しようとするのではなく、しっかりとその子どもを見て、 自分の関わりに対する子ども達のちょっとした表情の変化や行動の変化を見ていなければ わからないということを指摘しており、彼らとともに行動しその中で「感じとること」が 大切であると主張している。このように「感じること」は、その場でしか体感できず、ま た経験として受けていてもそれらを自身の中で消化することは難しい。今後は、事後指導 において、心を揺さぶられた体験を言語化したり、感じ取った内容を振り返ったりする等 して将来の教職を目指す学生指導にあたりたい。佐藤(2017)によれば、人材育成として、 介護等の体験を「みずからの原体験として持つこと」によって、人の心の痛みがわかる、あ るいは各人の価値観の相違を認められる心を持った人(=教員)づくりと、体験を教育の 場に生かしていくことによって、「人の心の痛みがわかる」、あるいは「各人の価値観の相

違を認められる心を持った」人(=児童生徒)づくりの2点を挙げており、こうした見通 しを持ちながら指導をする重要性を再認識することができた。

職務多忙の中、本調査の回答にご協力くださいました社会福祉施設職員のみなさま、特別支援学校教職員のみなさまに、心から御礼申しあげます。また、本調査結果について高田短期大学介護福祉研究センター第28回定例研究会において報告し、研究員のみなさまより貴重なご指摘やご助言をいただきましたことを感謝申しあげます。

【引用文献】

- 福伊 智 (2018)「教員養成カリキュラムにおける体験を通しての学び II 『介護等体験』 における体験の省察をめぐって 」比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究第 4 巻、pp.150-158
- 伊藤直樹 (2010)「教員養成における介護等体験の意味 2006~2008 年度介護等体験アンケートの分析から | 明治大学教職課程年報第32巻. pp.41-51
- 間山広朗(2017)「介護等体験」の指導法について-学生の体験日誌の紹介-」神奈川大学 心理・教育研究論集第41号,pp.303-307
- 山本智子(2017)「教員をめざす学生が『介護等体験』から得るもの 『大学外の学び』が 学生の視点を転換させ『感じとる力』を育てる - 」近畿大学教育論叢第29巻第1号, pp.1-12
- 佐藤真澄 (2017)「学生が社会福祉施設での介護等体験で『学ぶ』こと」山口学芸研究第8号, pp.89-100